

## 馬場昭徳歌集『夏の水脈』

### 河野千絵

#### 出会った声・培った声

馬場さんは、どれだけ繰り返して竹山先生の歌集を読まれたのだろうか。『夏の水脈』には、竹山広の語り口の面影がある。深い敬慕に基づいた誠実で真摯な学びにより、馬場さんは竹山調を礎にして自分の歌を築いた。聞こえてくるのは、一人の師に出会うことで生まれた馬場さんの声だ。

竹山広の歌に「うたふ何もなき日常と侮るな何もなきあしたゆふべこそうた」(『射禱』)がある。馬場昭徳はこの一首が伝える教えを実践している。日常に則し、真実を見る眼を養うこと。感情の微細な揺れを逃さず、率直に表現すること。人間をよく知り、自己への羞恥心を忘れないこと。この世の日々のかけがえのなさを愛しむこと。

- ・同じ歳といふこと何かたいさうなことのごとくに十人集ふ
- ・いつ見ても窓にカーテンかけられて窓も

カーテンも苦しかるべし

・どうしても末期の声と思へざる声に鳴くなり庭の木の蟬

・儲からうと思ひてならぬ自販機の二台を置きて少し儲かる

引用一首目。同時代に生まれ合わせて出会えたことは、実は「たいさうなこと」であると作者は知っている。二首目、開かずのカーテンと窓の暮らしを見る側にも苦しさがある。三首目、言い得て妙。四首目、結句の「少し」にこめられたユーモア。

・出る杭となりて打たることのなき寒き頭に帽子を載せつ

・人のよさに付け込むやうな物言ひをわがせざりしやいまの電話に

・炊事せず洗濯をせず掃除せずなほち万事妻に従ふ

・七十歳までは少しは我慢する分別盛りの六十七歳は

・指だけは小まめに動き頑張つて書いても文字が付いて来ないな

ほろ苦し自己描写の一首目、「出る杭」にならなかつた後悔を感じさせる。二首目、

省みる心は羞恥心と相手への気遣いから。

三首目、予想外の結句だが続く三首先に「歯刷牙子の二つ仲よく並ばせて妻とわれありしづかな家」がある。愛妻家の作者。四首目、

我慢を「少しは」するという分別の量を意識しているおかしみ。『夏の水脈』には自

らの年齢や体調に言及する作品が散見されるが、五首目は思いがけない不調への戸惑

いをユーモラスに述べて明るさがある。

馬場さんは情が厚い人だ。仲間をよく理解し、温かく交わり、大切にしている。

・小紋潤へとかけたる電話コール音十七回目で出でてくれたり

・やりたいことやつたからいいと言ひたり  
きまだ六十二歳の男が

・精神力で持ちこたへたといふほかはなき  
三年を友は生きたり

一首目、出てくれるまで呼ぶ電話と拝察。二首目、「まだ」にこめられた惜別の心。

三首目は「友」の三年に心を寄せ続けたことが上句でわかる。冒頭でも記したが、馬

場さんがとりわけ大切にされた人の一人が竹山広であった。最後にこの歌を引く。

・日に照れる竹山広の歌碑を得てよき公園となりたりこは